～プロローグ～

気がつけば、私は森家の歴史の扉の前に立っていた。

そこに至るまで、特別な出来事があったわけではない。

ましてや、意図して辿り着いたわけでもなかった。

ただひとつ、またひとつと、

忘れていた名や場所、そして断片的な事実が、

静かにつながり始めただけである。

扉を開けることに、ためらいがなかったわけではない。

恐れと、かすかな希望とが、胸の奥でせめぎ合っていた。

しかしそのとき、背後から視線を向けられているような感覚に襲われた。

――もう、後戻りはできない。

そう、直感した。

この扉の向こうには、新しい歴史がある。

その確信が、まるで電流のように全身を貫いた。

……今だ。

そう思い、私は意を決して扉を開いた。

するとそこは、ある湊町の喧騒のただ中であった。

潮の香りと人々の声が入り混じり、

陽光を受けた波の煌めきが、眩しく目に映る。

ふと顔を上げると、

小高い丘の上に城郭がそびえていた。

なぜだろう。

初めて目にするはずのその光景が、

何度も訪れたことのある場所のように、懐かしく感じられた。

――ああ、ここだ。

ここが、

我が一族の命を、つないできた城。

その瞬間、全身の毛が逆立った。

目の前には、始祖・休可（やすよし）の後ろ姿があった。

髷は落とされ、伸びた髪を赤い布で結っている。

振り返りざま、休可は静かに言った。

「これからが、始まりだ。」

医療法人社団慈弘会

理事長　森 光弘

昭和 31 年 3 月 16 日生

本籍：長崎県北松浦郡吉井町立石免 455

父　森 貞任（日本医科大学卒・整形外科医）

母　森 雅子（旧姓・吉野／跡見女学校卒・東京都本郷）

祖父　森 若太郎（江迎町赤坂）

祖母　森 シキ（江迎町志戸氏）

Prologue

At the Threshold of the Mori Legacy

A Personal Journey into History and Bloodline

Before I knew it,

I found myself standing before the door to the history of the Mori family.

There had been no single, decisive moment that led me there.

Nor had I set out with any clear intention.

Rather, it was simply that one forgotten name,

then another place,

then another fragment of memory

began quietly to connect, one by one.

I cannot say that I felt no hesitation in opening that door.

Fear and a faint sense of hope intertwined deep within my chest.

And yet, at that moment,

I felt as though someone were watching me from behind.

I knew then—there was no turning back.

Beyond this door, I sensed, lay a new history.
That certainty surged through my body like an electric current.

…Now.

With resolve, I opened the door.

What appeared before me was the bustle of a harbor town.
The scent of the sea mingled with human voices,
and the shimmering of waves reflected brilliantly in the light.

I raised my eyes, and there—
upon a small hill—stood a castle.

Why did it feel so familiar?
Though I had never seen it before,
it stirred within me a deep and inexplicable nostalgia.

…Yes. This is the place.

The place that had sustained the life of my family
across generations.

In that instant, a shiver ran through my entire body.

Before me stood the figure of our progenitor, Yasuyoshi.
His topknot had been cut away,
his long hair bound loosely with a strip of red cloth.

He turned toward me, and quietly said—

“Now, it begins.”

Mitsuhiro Mori
Chairman, Medical Corporation Jikokai

Born March 16, 1956
Registered domicile:
Tateishi-men 455, Yoshii Town, Kitamatsuura District, Nagasaki Prefecture

Father: Sadatou Mori
(Orthopedic surgeon, graduate of Nippon Medical School)

Mother: Masako Mori (née Yoshino)
(Graduate of Atomi Girls’ School, Hongo, Tokyo)

Grandfather: Wakataro Mori (Akasaka, Emukae)
Grandmother: Shiki Mori (Shito district, Emukae)

鬼突の森研究会

家紋と歴史にみる森一族の継承

【家紋】

ONZUKI

MORI FAMILY CREST

【家紋の説明】

本家紋は、地元において「オンヅキ（ONZUKI）」と読まれ、代々受け継がれてきた森一族の象徴である。

この家紋は、一族の血縁を示す印であると同時に、信仰・役割・生き方を内包する「家の思想」を表している。

森一族は、

歴史の表舞台で名を誇ることよりも、人と土地を支える実務と祈りを重んじてきた。

家紋は語らない。だが、その沈黙の中に世代を越えて守られてきた価値観が刻まれている。

森氏の起点

— 八幡信仰と源義家 —

森一族の精神的起点は、源義家すなわち 八幡太郎義家 に連なる八幡神信仰に求められる。

義家は、武勇のみならず八幡神の加護を体現する存在として広く信仰を集めた武人であった。

相模原周辺に伝わる**「森冠者」**の名乗りは、義家流の精神的系譜を受け継ぐ意思表示であり、森氏が信仰を核とする武家であったことを示している。

戦国期の森氏

— 可成・可政と信長の信任 —

戦国期において森氏は、

数ある武将の中でも織田信長から特に篤い信任を受けた家として知られる。森可成と、その実弟・可政は、勇猛さだけでなく、忠誠・統率・実務能力を高く評価され、信長政権の中枢を支えた。

森氏は名門としてではなく、信頼される実働の家として歴史に位置づけられる。

齋藤道三と「泰」の字号

— 武から祈りへの分岐 —

森氏はまた、斎藤道三を支えた勢力の一つであった。

この時期、森氏の中には**「泰」**の字号を持つ系統が現れる。

「泰」とは、安寧・鎮静・調和を意味し、武の力だけでなく秩序を保つ精神的役割を担うことを示している。

この系統はやがて永見寺・吉祥寺へと僧籍を移し、森氏の中に

祈りを担う森が成立していく。

陸の森と海の森

— 本能寺の変を境に —

本能寺の変は、森一族にとって大きな分岐点であった。

- 陸に残り、武家として再編される系統
- 海へ向かい、移動と実務を担う系統

この分岐は対立ではなく、生存と継承のための役割分担であった。

阿波から平戸へ

— 海系森の選択 —

海系森は、蜂須賀家政の知行を受け、一時阿波に身を寄せる。

しかし内乱を避け、最終的に選ばれた地が平戸である。

平戸において森氏は、

- 八幡神社の建立
- 水足役（港湾・海路実務）
- 松浦藩の海上業務

を担い、武将ではなく海を知る専門家集団として地域に根づいた。

継承宣言

— 桜は散っても、森は残る —

桜は散り、時代は移ろう。だが、森は残る。

名を刻まれずとも、人と土地を支え続けてきた営みがある。

本研究は、その「残り続ける森」の記憶を掘り起こし、

未来へ手渡すためのものである。

森があるから、また桜は咲く。

鬼突の森研究会

代表　森 光弘

ハートサウンズもりクリニック

①【正式学術文】

源義家系譜森家海民の系統的位置づけ

源義家（八幡太郎）を祖とする清和源氏系譜の森氏は、本来は陸上武士団として成立した家系である。

しかし中世後期以降、その一部は西九州沿岸に定着し、海上交通・警固・輸送を担う海民的性格を帯びるに至った。この系統は、一般に「森水軍」と称されることがあるが、阿波国において成立した藤原系在地豪族としての阿波森水軍とは、系譜・成立過程・組織性のいずれにおいても本質的に異なる。

阿波の森水軍は、藩制下において水軍指揮層を構成し、軍事的・行政的権限を伴う制度的水軍として機能した。一方、源義家系譜の森家海民は、松浦氏の水軍編成に組み込まれつつも、水軍の中枢指揮部を占める存在ではなかった。

松浦水軍における森家海民の役割は、航路把握、操船技術、潮流・風向の知識、海上輸送および沿岸警固といった実務的・技術的領域に集中していた。すなわち彼らは、戦時においては兵站と航行の担い手として、平時においては海運・港湾維持・信仰的結節点として水軍組織を下支えする存在であった。

このような立場は、指揮官層ではないが、水軍運用に不可欠な「基盤海民層」と位置づけることができる。源義家系譜の森家海民は、松浦水軍の母港的存在として、軍事と生業、信仰と海上技術を結びつける独自の歴史的役割を果たしていたのである。

②【研究コラム】

「阿波森水軍との混同史」1 頁用

なぜ混同が起きたのか

源義家系譜の森家海民と阿波森水軍は、近代以降の地方史・家系叙述においてしばしば混同されてきた。その主因は以下の三点に集約される。

第一に、同じ「森」という姓を用いる点である。

第二に、いずれも「水軍」という語で括られてきた点である。

第三に、江戸後期から明治期にかけて編纂された史料が、系譜的検証よりも地名・姓の一致を優先した簡略記述を行った点である。

しかし、阿波森水軍は藩制水軍の中枢を構成した制度的軍事集団であり、源義家系譜の森家海民は、松浦水軍のもとで海上実務を担った海民層である。この両者を同一視することは、水軍史の構造理解を誤らせる。

本研究では、「森」という姓の一致ではなく、系譜・機能・制度的位置を基準に再整理することで、混同史からの脱却を試みる。

【松浦藩主】
└── 水軍中枢（船手・奉行・有力水軍家）
　└── 実働・基盤層
　　├ 航路案内
　　├ 操船・水夫
　　├ 海上輸送
　　└ 沿岸警固・信仰拠点
　　↑
【源義家系譜 森家海民】

④ English Summary（5–8 lines）

The Mori maritime families descended from the Seiwa Genji lineage of Minamoto no Yoshiie developed from land-based warriors into coastal seafarers in western Kyushu.

They were fundamentally different from the Fujiwara-based Mori naval families of Awa, who formed the institutional core of a domain navy.

Within the Matsuura navy, the Mori seafarers did not hold command positions.

Instead, they provided essential maritime functions such as navigation, piloting, transport, and coastal security.

Their role constituted the operational foundation—rather than the command center—of naval power.

This study redefines them as a “base-layer maritime community” sustaining naval activity in both war and peace.